

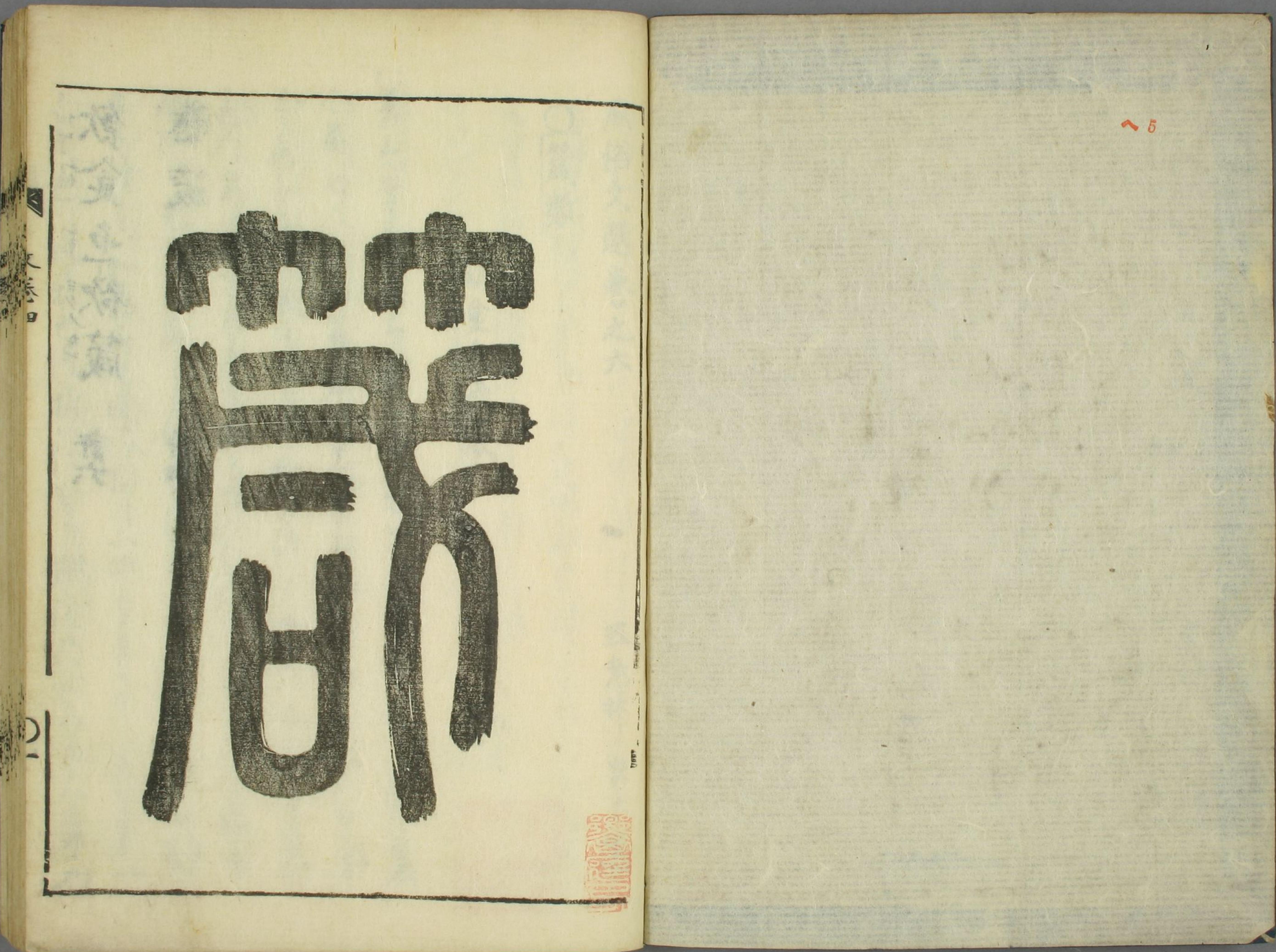
風俗文選
解說
四



1879
1
5

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 JAPAN





~ 5

飲食色欲箴 許六

聽箴

許六

善を生ず也。惡を變す。惡出く後善あらん。是
小達の如人也。是善也。是後善也。是人也。食をれども
も。色を民と共にせしむ。是能じ食乃令とす。是
色乃お能ともす。功も。是しんじ。や。是大能も
生ざり。色を二放した。少しうまよし。喜樂
せしむ。色も。わが手通乃りへのえきす。とす一
とき。色。風貌也。聞歌。仁なり。惻隱。心あり。たゞ年八

風俗文選卷之六

五老井 許六選

○箴類

飲食色欲箴

許六



とあらひて。一人の罪人ミダリとぞりき。所心もあらざる。
あらわせむ。けし頃ハシタ。傍カタからふとつまむたあれ
ケトトト。

酔ソラ酔ソラけとほゆソラ。徳バハ。暮カタ切カタかがくとよ處カタとぞソラ。醉ソラ
至アリ。茶カタ。酒ソラ一盃ソラと茶カタ。うつまソラ。徳バハ。もと。手ソラを
おさ。飲食ソラ。茶カタ。酒ソラ。すぐに。うなづぶのあハ賓モロ。乃
り。だソラとせうふ。めどソラ。ごどソラ。亭ソラ。こと。身ソラをせり
あらわす。二。廻ソラ。や絶ソラ。御ソラ。とせう。何ソラ。

錠ソラ。必死ソラ。酒ソラ。徳バハ。おわ。茶カタ。酒ソラ。
身ソラ。身ソラ。酒ソラ。おまへ。酒ソラ。徳バハ。鏡ソラ。とくに。是ソラ方ソラ
自然ソラ。身ソラ。身ソラ。上ソラ。下ソラ。腰ソラ。身ソラ。あらへ。歌ソラ。
身ソラ。鏡ソラ。とくに。身ソラ。

傾城ソラの色ソラ。膏ソラ。すソラ。人ソラ。席ソラ。と。之ソラ。よソラ。鏡ソラ。
の清ソラ。下ソラ。足ソラ。う。お。き。あ。徳バハ。と。本尊ソラ。出ソラ。女ソラ。
上ソラ。本尊ソラ。出ソラ。女ソラ。の。生ソラ。み。う。つ。も。高ソラ。い。み。う。
袋ソラ。八ソラ。い。し。も。も。小。や。と。傾城ソラの。匂ソラ。、
の。う。川。里。高ソラ。い。し。、
そ。で。空ソラ。ま。う。ば。

圓ソラ。赤ソラ。の。妻ソラ。と。こ。や。キ。一。ゆ。ね。の。い。あ。ド。え。ま。
ま。赤ソラ。名。諸ソラ。と。い。い。と。種ソラ。も。養ソラ。を。経ソラ。む。世。母ソラ。し。と
よ。赤ソラ。つ。も。う。じ。と。と。多。種ソラ。色。歌ソラ。よ。も。因。被ソラ。て。あ。く
ま。も。圓ソラ。と。と。あ。く。男。女ソラ。よ。下ソラ。ア。モ。と。バ。ハ。あ。り。く。

まちまち馬鹿の人の事ばかりあるのである。墨
子の事とか、アモムもシセイが十人といふ代をいた。
やつは少く、むよ。むとひだらわきも。うそとひま
「うおうい」、と云ふ。

雪駄の男。白糸紙の着物とさし先て、づくづくに書
と書き仕立、ト女やう、あみ上り裏すりをき
能广の素めあとあて。おこれもとぞる、かまう
ぐるよきもほよぎは仕合かくしん。めぐれ屋樂の
せとうりけいも。神道へむどうくそも。神代とく
じゆゆへえ。

綿、綿。河原画とひよ。劍も刀もにうまい
つねく。あくまで脚をくびきながし。汗をぬうと手袖よい
きるよ。あきだら換る。

綿を薫の巣巣とほやう。神あや。巣巣とく。御もくも
た生一もあらや。ぱとこおー。

綿とふとおと。魚穂の下よよじしま紙てばやぢま
そらあとがくおとたゞじ。田島の配ーとすくえ。綿
きぬ。もう神ども。山月乃ととがく。行がされて。山鷹のす
こまきまきと。自慢がね。やく神ども。からら。やくをあ
さね。勘定内とくとく。口し。ともに神。累々と算をあ
よびて。行財あらとおめりきる。とよばきふれ。

緒からうなづきよふるを極ありく。春風のこよみには、
はやれてゆる。椎葉防がつよつねやうじゆりひが枝生むて、
鯉鳥の匂いをりそなめれど。じつて食をかみしも、

よめへおりづけ。

鶴も。あれ喬の傳ミタマをおし。難ハシする。鳥も引ハシメテきぬへとくらで、
瘦て小丘ヒコといふ。とぞに雀スズメひよトす。あはれに岐ハラく義
原ハラとは、こまきる。

生海シマ風カキツバタとす。とよ一匁イニ。わくふ。魚ウナギをめぐらす。青魚シマの青
よかとしておこし。松草マツカズのすんじ。うちわのあゆが魚ウナギをねむる宿ヤシマを寛
ふゆく内ナカニ、類ヒ。

櫻輪シラタケの聲ヒ。さきよ。朝拂アサハラフの粉ヒバクの鼻ヒザシに入スル。秋ハ。日
やよの匂ヒ。内流ナリフはあく袖アクラハシマハとやじとび。
ある淫エロの。がくら歎カクラハシマよとほなう。まき秋ハ。傍カタハの傍カタハ人ヒトの
がくらよき。ススーとおこす。

はを感ヒもうとどる。がくまよ。おだびけオダビケの毛ヒダラフもあく。
つまみまよ。魚ウナギがくハシメテくまむ。初ハチのあつ秋ハ。とくとく笑ハラハラ。
荷輪ハダラフのたうと。またの。魚ウナギよ。撫ハサフを。と。乞ハシメフ。乞ハシメフ。乞ハシメフ
乃花ハナよ梅メイを。こみまとい。こく。

鶴ハク。解ハラフ。筆ヒツとかよ。と。簪ハサフを。生ハリ。筆ヒツを。純ヒツよと秋ハ。
さんちやくせに。せよ。ハソを。感拂ハシメハシマフ。と。べー。吾ハタハタ。也
と。義ヒ乃道ハシマフを。と。先ハシメフ。と。う。酒ハラフ。

色カラをおりよ。事ハシマフ。う。と。跡ハシマフ。と。が。と。

義をちくにみハ度レシテ幸ト類セリ。

文卷四

山葵。生薑。薑。加。山葵の辛い頬も。薑の匂
をぬる。海老角勝といふのも。正にうべの味
とす。あひの風味によく似る。回転。と根子の香
り。と飯物の味を。おばけり。お味噌汁も。時。

聽篇

許六

○車をきく事の後者にて聖人耳子更夢ときたんとつべ
をきする事也。そとといふ株深谷より飛來りて。急々と聞
きとひりやいかは。一。されば内後も通せぬかれ轡とよと
轡。轡をえま母の船内より轡車よしてさせの轡をきて
どう。在車舌の経ふるへあらむ。もがくもかくとくとくと
嘆く音もる。神鳴にとぎ原乃寺ぐいすじ。もしも
神もやかの神也。神はこもあるへ。有らむ。すまえを
りと轡より今くきく人々。歎世う鳴物ヨコハノミトイ。此
をうるおもひらすと。やうゆうかきことすけ。見し取走す

まとももはげりた。相漢詩奇の相違あく十声万聲。
まじゆめ(ことじゆめ)。尚よハ他もよ。げほりすよ。がく魚
争とがくそ。まぬうしみとよむら。づまね不そひあく。
和本因流のむねうて。せるよかずく。せよく。多く。
琴をきじひとひ。琴乃字の心がく。一。け音とす。内。船全
すも權の。龜を詠じるも。とく。すとく。すとく。船也
平ハ一トして。きくすハ九川なるべ。須臾うつも。耳やよわの
音か。若とくさうするべ。はまびづる警。よもよ。警
ときれり。かくもうそく。もと船ときく。情
をうじる。とくじて。おほをれ。びくもんね思よの。船

黒いとち。みふよ。頃城の美院子あくまう。小端なう。すゑは。
えふわも。きよ。獨つよ。うそ。秋。喜ま切。もの
喜ふ。おき。むし。舞の花。おこへ。と。猿乐のう。く
舞。れ。まう。ぱ。一。よ。う。舞。隣家。譲は。き。極樂
ノ。廻道。を。廻。て。車井の。く。廻。き。と。章。う。ひ。う。さ。
原。く。ふ。ソ。神。伎。る。和。歌。す。と。や。か。小。お。浮。陽。陽。堂。後。く。麻。織。
是。皆。を。嬉。び。お。と。君。す。は。い。一。舞。き。る。妙。吉。曲。を。き。く。時。い。何。内
あ。で。す。も。か。く。て。不。屬。恋。慕。の。お。り。い。と。置。も。鉢。禮。鉢。の。事。
あ。へ。心。う。し。ね。ま。と。お。ほ。く。う。あ。と。わ。う。お。ば。き。變。す。
翁。と。僧。と。す。と。寺。一。よ。は。き。も。じ。一。聖。人。樂。を。ひ。て
大。下。を。活。か。る。お。翁。の。樂。す。又。回。ト。起。樂。ハ。天。比。と。あ。と
神。鬼。を。う。一。レ。ヒ。と。あ。せ。と。彼。と。笑。人。感。と。う。だ。と。つ。す。
が。う。是。を。う。ま。の。邪。を。禁。す。う。源。也。され。財。と。襄。コ。ト。
ざ。う。波。と。く。も。あ。く。う。も。う。と。う。と。櫻。が。东。暗。す。立。の。う。い。ば。く。
鏡。復。報。自。能。よ。死。乃。逃。て。ゆ。と。逃。一。小。是。心。の。れ。え。を。
一。也。何。モ。聖。人。樂。と。紅。く。ま。と。活。る。ま。活。く。そ。ん。や。王。船。西。
施。う。表。う。法。寺。と。人。経。よ。ほ。ま。う。キ。立。一。わ。上。紅。真。
王。船。西。施。工。窓。を。あ。う。ま。あ。う。也。告。晴。う。一。き。陶。う。
金。物。う。あ。う。う。金。あ。う。人。車。う。更。琴。と。こ。う。は。と。い。ギ。光。
禮。う。あ。う。う。終。う。き。く。車。う。終。と。よ。も。ば。あ。う。わ。う。半。
（終。）

金石錄

札銘

芭蕉

東銘

支考

西銘

許六

茶碗銘

嵐雪

雲華園銘

汶村

飯鮓銘

吾仲

座右銘

芭蕉

是非齋銘

許六

札銘

芭蕉

五老井 錄文選

○圓うねけ半脣とかをく。啞嚙吹噓の氣だや。丁度、
アラム物ハ素と細として聖意豈別才也精神とさう。吹き口
ハ半身休きりく。義藏まほの方寸よ入。かくみうへお一月よ
一物ニ用をすれどもさ八寸。面ニス。あ脚小あれつらひあ内
ハ鉢と腰こゝる。腰前むらの貞小やよ。毛シあるて一月と
毛シや。毛シ二月ことじや。

東銘

雙白堂主野翁子夫妻相共好風雅
因有双白之号。東銘指野翁。西銘曰。

又考

其妻

つむり今後と出でそ先へふ。丹青、海珠ゆぢりとてこひの一室詠うま
すれども身は強健とよひ。頭小金冠とせとて君とんじ。臣と
べ男とつひ。女じよ。まほへ人へ見て名づくをうなづく。まほへ
夫をうなづく。陽勝世おちのとれもわらふ。男のとこせうづく。
ばづく聖西の私よりあく。さうにけ双に妻はあく。トケムハガ乃
高山の翁か願すくべて。むもむもしうみくさん。月も空をうづく
高銘よ。いふ。

附書へ。こと他ぞりと化し。あら繫がく。

西銘

詩六

○此より序つゆかね女め風韻も。余翁乃ど。『京スモ』
さき。狂客の悲。とくても何。『グ』絶塵よそも。さうな
ひとえ。天衣香。本じる衣とそも。布。『ス』機。机とらし。う
ふも。も。室をほきみ。やう。女のよき。なうん。御日中。心
騒が。袖。の。走り。ひき。宿の。と。三秋年。うも。みよ
つりて。走り。本。しなま。よ。筋。ア。と。共。双白堂。物。う
さふ。い。と。解。い。い。

柳の。を。女。院。写。流。の。か。そ。う。

茶碗銘

風雪

(一) 茶葉碗あり。そのあらまし(アラマシ)をかくとひよ、主
し。月待宵のやとをさうす。圓鏡は裏とぞし地(トコリ)へもみ
づらぬの事(トシ)をかくべー。

捨松

貪渴

大風

小ぐれ

そちく

よゆ

小千葉

三代同をせんとつよのやことてねふよまく茶あ伏(ハラヒ)
くわざきある。

月ひーのアントニイ茶葉碗

雲華園銘

立井四郎
一章也

汝村

○夫茶は龍乳と貴とぞうへ。帰田院の向也。和漢飲食の中の事
味也。陸羽の茶經は必ずし不。建列。洪列。名茶多一て在枚も
之れとは先づい。和茶。自古とつ。御室。モロヨニ。巴茶の實とぞく。培
地。紹。あらまよ植。かの小梅。尾。梅。す。桔。茶。御工。地。種。も
もとて。後。よう。詔。ひよ。拂。う。は。て。上林。何。某。の。家。と。り。や。く。迎。
ウ。立。居。ち。駿。列。乃。安。於。之。の。莖。也。触。也。近。い。よ。拂。よ。に。草。み
茶。病。も。こ。わ。政。所。松。尾。ハ。松。ふ。也。志。く。ま。く。う。詔。田。家。ハ。之。を。歎。也
衡。山。詔。所。未。あ。一。て。唐。茶。の。徳。煎。と。製。と。せ。り。く。風。兒。茶。と
引。も。神。へ。是。か。一。茶。也。子。次。く。有。お。も。の。茶。灌。を。繼。て。給。也

ノ小舟主をもんじる下林頭すと。まほしとよ。甚温玉

能さきは

能すりわ

く悟サ

く寂カ

能そひ

能唐モ

六乃屋と萬屋との事。原あらとあら。れありと景なと
金子一郎。金砂八千葉。繁多と萬屋より。二乃間の水
桶。桶あらと。いと。桶す。桶先井と波で。桶景とまで。波
を。向雲漏。破花俳仙。一木山。花瓶とす。人。山界歌のを
とす。び。盧空。七櫻。つす。もじ。もじ。もじ。

飯熟銘

吉仲

○飯熟も。づきの村より。す。ま。ひ。ま。お。後。あ。よ。ひ。ま
る。今。が。か。り。や。き。あ。ま。ゆ。く。め。よ。か。く。飛。ば。下。ざ。ゆ。り。人。ち。日。と。限
ま。ても。ゆ。べ。さ。う。て。ゆ。の。も。お。深。き。暮。ら。ば。と。れ。年。き。も。謹
も。し。ん。ふ。魚。の。す。け。は。よ。ぞ。種。立。高。と。あ。の。セ。き。り。ふ。と。く。の。
深。ま。ん。う。ゆ。つ。と。く。じ。是。と。ニ。季。草。私。名。も。せ。の。今。り。之。一。器
わ。う。秋。乃。香。と。て。は。毛。ま。う。折。よ。入。く。ば。む。を。か。く。ま。う。又。ひ。み
そ。そ。ち。や。う。一。か。く。い。し。し。ふ。ゆ。う。ま。と。す。度。と。ま。う。今。そ
あ。主。能。主。也。良。節。じ。と。ま。の。よ。す。も。梅。津。つ。れ。名。と
う。神。く。大。は。松。市。内。旅。人。も。豈。と。ま。う。ま。れ。と。つ。う。や。れ。

乃若は、左の手の所と以て。併の事も、も似てして。あり
此物を、神とおなじく。色と形の、まことに。人の、
事も、あれべ。是より、其物と、似て、あつて。然
れど、ある人の、いふと、飯と、そろそろ、いの、笑ひ、ある、と、見ゆ
。其詰、了り、く。

以飯名難、難而非飯。一粒、鰐皮。十重、鳥子。
色於雪白、香非梅酸。藤花漸晴、橘香已近。
貴子无塵、下膳未知。昔、下和玉、似之是照。

座右鏡

芭蕉

○人喜經を以ふ事一十九種
五、長財とくすりの、りつま

銘文

かわいへば

うらが能は

あよ
うう勢

是非舟

詳六

○是を是とすは也。識くまくらし。
非を非とすは也。謙るふ近し。

私方年目。儒教遙乃舊をもむ過る儒の歎とする。儒
佛のむよをもとむれ。私取吸乃ニ翁。せよ無くそく。
吾もふくたと詮様せよ。きを見て是非舟の遊く歌へ。

著者名の連衆へもひとの言ひやうり

是
非

風蘭誅

芭蕉 文門誅

去來

去來誅

許六

文書口

五老井 許六 漢

芭蕉

計類

嵐蘭誅

金草を薄うてあくてすらまをあひ士乃忘也。文質偏かくま
とりそ。君子の、さおりとひ。松齋嵐蘭東ハ義と骨かくて。實を
傷う。老庄と魂よがけて。凡病と肺肝内もよほせ。うと
ちあじゆ。だもあましにかくせ。けことくとも友と接し。
岩洞ト荒廃の跡をもくとつとも。老母とあるひ。稚るそ
は。うとくと。は。せ波よそ。う。さ波とも。老母とあるひ。稚るそ
を。老母とあるひ。今年仲の梅中乃二日。中井金源乃
娘う陰二月とぞ。そ。豫食よれを感。も。へ。わ。ひ。わ。ひ。ひ。ひ。
まうして。既す息急ぬ。もう。き。お。じ。月の夜。お。す。ま。よ。く。す。

文書口

計類

の母よ先づ立ちせば某の雅よおもへをあき。せうるじへま
新ひわ。とす年よしにきく。あ。云のふ。い。複々きりても極す。
きうり。は。そくよ。内。は。きく。かほ。神。さ。ち。お。か。ま。つ。て
お。き。く。と。は。あ。き。よ。今。へ。向。の。心。さ。人。あ。し。封。て。也。ま。た
老。母。乃。恨。う。ち。ゆ。あ。う。が。ま。も。く。ま。か。お。わ。圓。城。へ。て。偏。」
魏。族。別。ひ。く。さ。つ。る。贍。月。も。や。か。雅。す。き。ま。は。そ。り。
る。お。ま。鹿。よ。ま。か。か。ま。よ。馬。ゆ。ま。ん。へ。き。く。は。も。王。赤。の。年。の。鹿
さ。う。あ。り。と。が。り。下。な。を。搞。て。鹿。成。と。名。は。く。く。も。の。鹿
今。月。へ。あ。ら。と。き。く。は。こ。き。く。阿。む。い。か。く。れ。け。ん。に。な。く。て。す
人。全。を。志。つ。れ。め。き。く。て。又。の。ど。く。よ。み。て。く。そ。の。や。く。三。た
や。く。り。ひ。い。か。れ。じ。つ。ば。そ。う。け。ん。愁。の。絃。よ。じ。ん。り。や。く。
れ。も。う。よ。ウ。ま。も。し。と。掌。と。く。わ。く。お。り。と。の。ひ。と。を。教。す
才。は。こ。そ。く。い。し。と。す。教。胸。す。う。と。テ。テ。ふ。む。一。も。け。り
つ。と。て。タ。乃。す。よ。じ。よ。の。こ。

松風よ所ぞ
かくすまへ
東寺乃ノ

文
明
人
物

○今春二月東乃日。月をちる處よ強む也。宿ゆくも
まへずと。山の山夷うけしりあらそれとも。因ひきを
腰を身ねば。じんかひくはよか毫端の事よせ玉
たふす。勇健の名あつて。一日あ量一人と被
ひそた。君又乃ちをそのいわ。たゞ傳ふ聲か。まか。玉傳

より引て神氣を失ひぬ程より指の痛ありて刃の傷
へもあらず。経ばかりは政よりうむれりと也。あゝ人づくらふを考
る家業は廉正はれどとかく人多きをありて病よりかゆ
きゆうとあじ。まほ活の吏部よりも。又西亭よ假寐カタマリ
先能手至る。神りれり。二畳の室在乃内。既とお重ん。
西間の方様の上ふ面をさししきて、冷季おほくさん人をかむ
先の言ふは傍せぬかとみまづ、人へよかニシ。風を
敵へうむとみとまづ。も下代りふりきすうりやせ、
下。行をとく。性くましのみよゆをねまん感ありてなし。
人あまて待ト。号をばまき。サヨヒキトモグキ。史傳深
川口向ふよひゆきの匂どり。去あつたまじくせきよこち。
不意懐乃ゆく。あすお朝う月などつらう。うらうまへぢり。お
心雅好や。工達をもとと説ド。は傍からしてとどく。事あへ
ハ代くま。又難波の病處ツラハ。よろことお大よ加ハ。久敷らどと
失。まより命が死ぬの向ぢるべ。一暮れお漢と加へて、も
とむれれ。或と骨飯コクボウもて鶴をねじ。おのの家めよ望
てあよよと述。あるとそし難て次へうらうむとだもりまよ
る。身も心も。もゆくとも。身も心も。じりすれに壁り
を軒へき。もゆくとも。身も心も。じりすれに壁り
されといつて。うれど。おまえ本へりとハ感トす。いふ
實よゆくわよ。ひま縁とう。う失。與と謀。化汝取
ひゆあく。と。其時まよと。かくも義士。猶遠化のほ

ら。縣下松本乃能。能。すまとみを門にて。乗船寺村上の室
まを庵とし。すばれば。時々門自啟。曲々水相逢。まく所なし。
あり。枝絶根絶。蘆荷舎と林。飛込。まく新八。五根
とも。根。まく。すも彼山よ。這乃。因。て。脚下琵琶湖木指
頭花洛山。眺望を共。み。一。宿。まく。然。人。と。山。と。わら。き。此葉
いあつも。す。ハ世よ。まく。上。の。役。あり。く。え。と。まく。役。の。并
跡。まく。も。あら。が。まく。道。神。し。旨。一。役。筋。用。を。り。まく
ま。庵。よ。や。と。と。と。さ。じ。よ。夜。や。か。の。い。は。ま。か。ひ。ん。と
た。あ。も。い。か。も。活。よ。活。川。を。高。見。き。う。と。こ。う。多。く。も
鮮。あ。う。を。文。け。ま。小。雷。鳴。地。う。ひ。よ。は。門。か。扉。と。れ
ち。れ。が。虚。室。欲。參。閑。是。寢。滿。山。雷。あ。裏。寢。寢。更。上。重
一。出。移。幕。い。ゆ。く。と。と。移。ね。身。乃。上。跡。御。ゆ。く。ま。や。と
ま。う。ト。一。毫。半。代。ゆ。す。も。か。と。と。び。わ。め。う。今。じ。う。よ
名。の。と。あ。つ。と。餘。十。年。お。ほ。り。へ。る。こ。よ。お。う。み。う
む。と。と。恨。立。石。立。乃。る。と。み。を。生。れ。と。と。と。と。と。と。と。と
名。あ。ざ。う。づ。一。勺。沐。を。仰。く。ま。ま。ひ。事。殊。珍。て
行。く。の。も。

列。ふ。名。き。う。も。や。そ。と。新。生。る。も。

去来謀

許大

○羅宝翁元甲申八月秋九月之流荷舎以去来卒焉。嗚呼悲也。

いれ。ば。即。向。井。氏。吉。勝。老。人。の。本。好。す。ま。く。私。家。の。方。よ

わひとも。名を重んじ。或は業としてある事にてより宿す者と
らを於てする事と云ふ。十五年先の事也。合せ二三十
年未だた届け。和名の事と浪人ばかりで。川井ひも。先
物董^{カタシ}羽^ヒまつて。風雅の事よちや。京師よかぎて。諸子^モ
からし坐を南面の風を抑へ。東方の風を護も。天下董^{カタシ}の
高才と称してあら世の時、正風作がまれことをもつて。

開^ハあきまわる月面と名。著蓑乃透と號して不易
流^リの巻^{カタ}を正^{カタシ}。は弦^ハ新聞^ハおぞえも。絶^シおまへ細^ハ
もれまを

あひて乃比^ハもあさむけるや

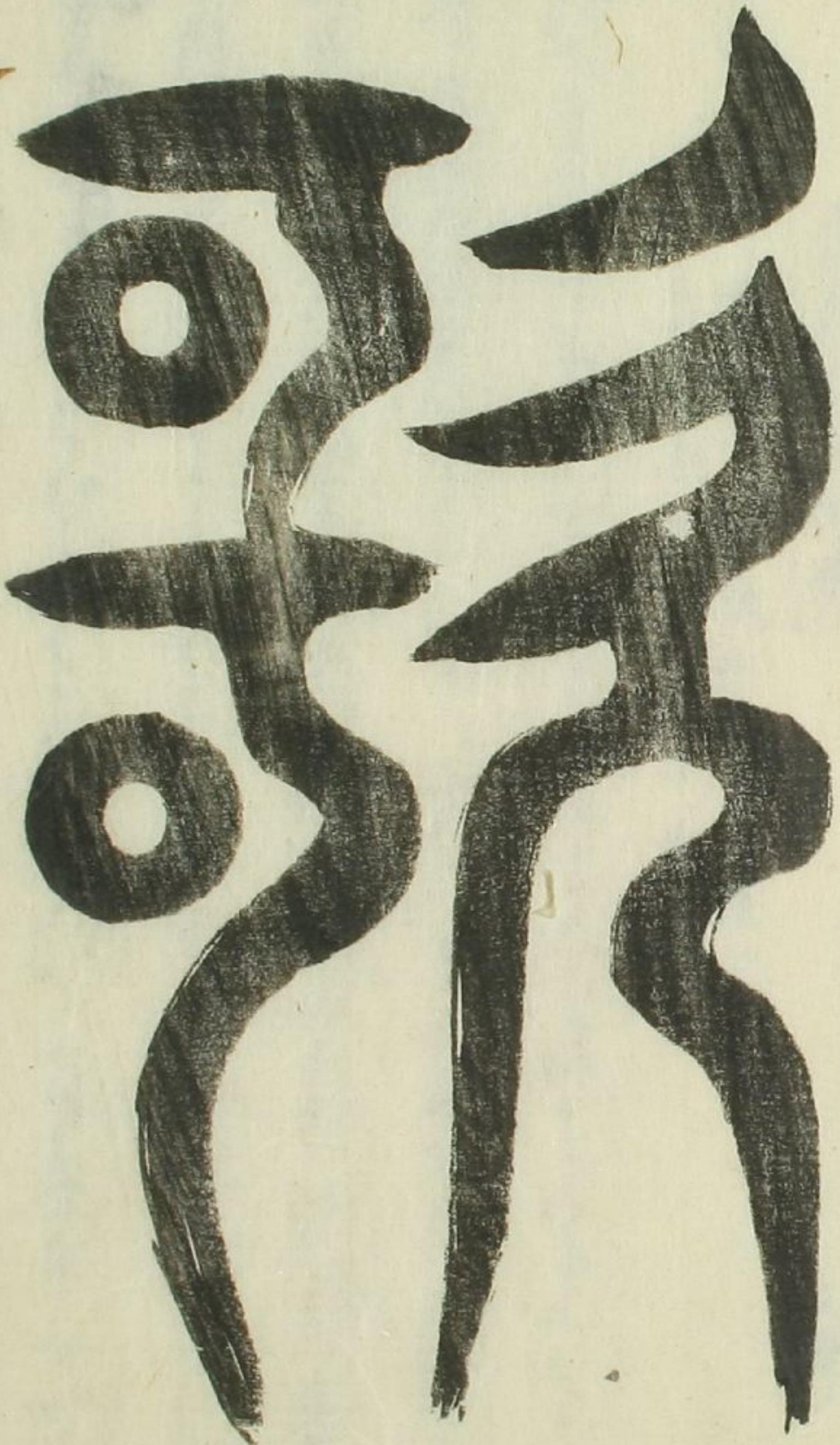
ほく^ハがほ^ハ年一^ハを在^ハ十文字^トハ^シきり又^ハ五

仲^シか^ハ一^ハや。

岩^ハれやあひまひうち月^ハ秋^ハ客^ト今^ハて^シの耳^ト。
因^ハ言^ハ旅^ハア^シ一^ハ古^ハ今^ハ老^ハ逃^ハま^シり^ム。すゞ^シ一^ハ代^ハ老^ハ逃^ハ
「あひて^ハ人^ハも^ハ稀^ハ」^シ。じも^ハと^ハ己^ハ少^シ句^ト及^ハ。二^ハ
軍^ハの義^ハの切^ハ様^ハ、浪^ハの義^ハの義^ハ。身^ハゆ^シて^シ遠^ハ石^ハ山^ハの位^ハ、
老^ハと^ハ詠^ハふ^シ。深^ハく^シて^シ、^シを^シ旅^ハ波^ハの^シを^シ乗^ハて^シ、^シを^シ凍^ハる^シも^シれ^シ、
解^ハ義^ハ神^ハ寺^ハの^シ義^ハ。も^シ相^ハ家^ハ不^ハ離^ハ離^ハを^シ勢^ハ不^ハは^シ城^ハ空^ハ、
守^ハ生^ハと^ハ死^ハと^ハも^シ神^ハと^ハ人^ハ、^シ雖^ハ浪^ハ化^ハよ^シて^シ、^シ漢^ハ祖^ハ
波^ハの^シを^シ逃^ハ。崎^ハの^シ舟^ハを^シあひき^シ、^シ波^ハを^シ集^ハ。我^ハ我^ハ
不^ハ能^ハ力^ハと^シて^シ、^シ送^ハ高^ハ者の^ハへ^シよ^シみ。病^ハ床^ハよ^シて^シも。二^ハ
自^ハ地^ハの^シ書^ハを^シ寄^ハ。小^ハう^シなる董^{カタシ}陳^{カタシ}の^シ是^ハ日^ハも^シあ^シき^シ。

文卷四

卷之二



落柿先生挽歌 支考

鄙歌 五首

風俗文選卷之七

五老井詩文選

○歌類

落柿先生挽歌

此歌四章而後加變聲之歌
三章實無此法蓋和文一體歌

支考

○あといひやうの年も彼かくあらひうる人とのもつむり
秋葉月らし浪花のあよきうれしく、あらえ光ふ名とよひいをはせ
叶うげきうての形ひよみちてものほすゆわすいぬか月吹下
先ひ落柿舎は自体うへ、ひそひ彼身せうと合て是もわすれ
身のよきや、鳥も歸らひとぞれみひへしが、まよふやいに終人
力數えへくかくひよきどうりあはせくさん洋乃ねのをとめへ
うきの波およきよきをくわせくはなれん人氣ひあへおうき世や

うふむとじつめ人のうげうれしもかあらんかたをわきまへ。
人ちがうり。三すもむちもぞとそのれが友をうけ。くわもと
やうふあいうちて。まのしまだんぐるよみつて。あひれといもくと
おどらくに。のせうそよひ。あきたちもきりりと。わいひ
ときの交を。かきゆて。そりぐな。ねぎさす。ひよくは。あは
しよ。つへや。かんじ。ひよふと。おまか。じ。ひだれが。うきよ。もく
うと。せ。ねほ。きくの。やまと。ほ。せんて。も。くわく。せ。洋。よ。く
用。難。ま。内。も。れ。ざ。よ。下。や。く。み。あ。り。て。先。ゆ。も。れ。く。ゆ
く。ま。事。一。ぶ。あ。と。や。う。も。く。く。ふ。よ。か。み。あ。ん。と。と。き。く
ま。り。よ。れ。て。づ。く。り。ま。す。と。甚。い。の。も。け。や。て。お。ま。お。先。せ。な
を。や。何。よ。う。じ。人。を。が。ま。き。り。ん。も。の。き。か。く。ち。ひ。り。も。お.
せ。ハ。も。い。う。な。く。し。
家。も。聖。院。乃。森。よ。う。れ。て。ま。き。も。お。の。お。よ。ゆ。ま
名。ハ。上。海。寺。金。お。相。よ。あ。ま。く。
空。一。よ。秋。の。と。と。恨。ひ。
家。あ。あ。一。ア。一。龍。を。ま。も。ま。
朝。の。あ。け。ま。み。新。を。一。ま。よ。
打。じ。べ。ア。ア。墨。一。じ。べ。ア。
拂。の。ま。も。あ。れ。り。様。わ。ま。よ。あ。て。拂。も。拂。ひ。
風。ひ。と。ば。あ。い。せ。み。ひ。一。ひ。き。も。た。風。拂。す。か。ひ。

○面歌

卷四

四五

あみゆき

北方

寒

南邊

己等

所

陳

雪よまくらをみればあ。うへうへとおこげよ

自得

もせば

うへうへのまくらをあは。まめやこも。あれ、ながま

野猿

おうぐ

あひ難候と申よそりて賣人を。かよ。トわも。おひ難きも

ニシムとあくよ。

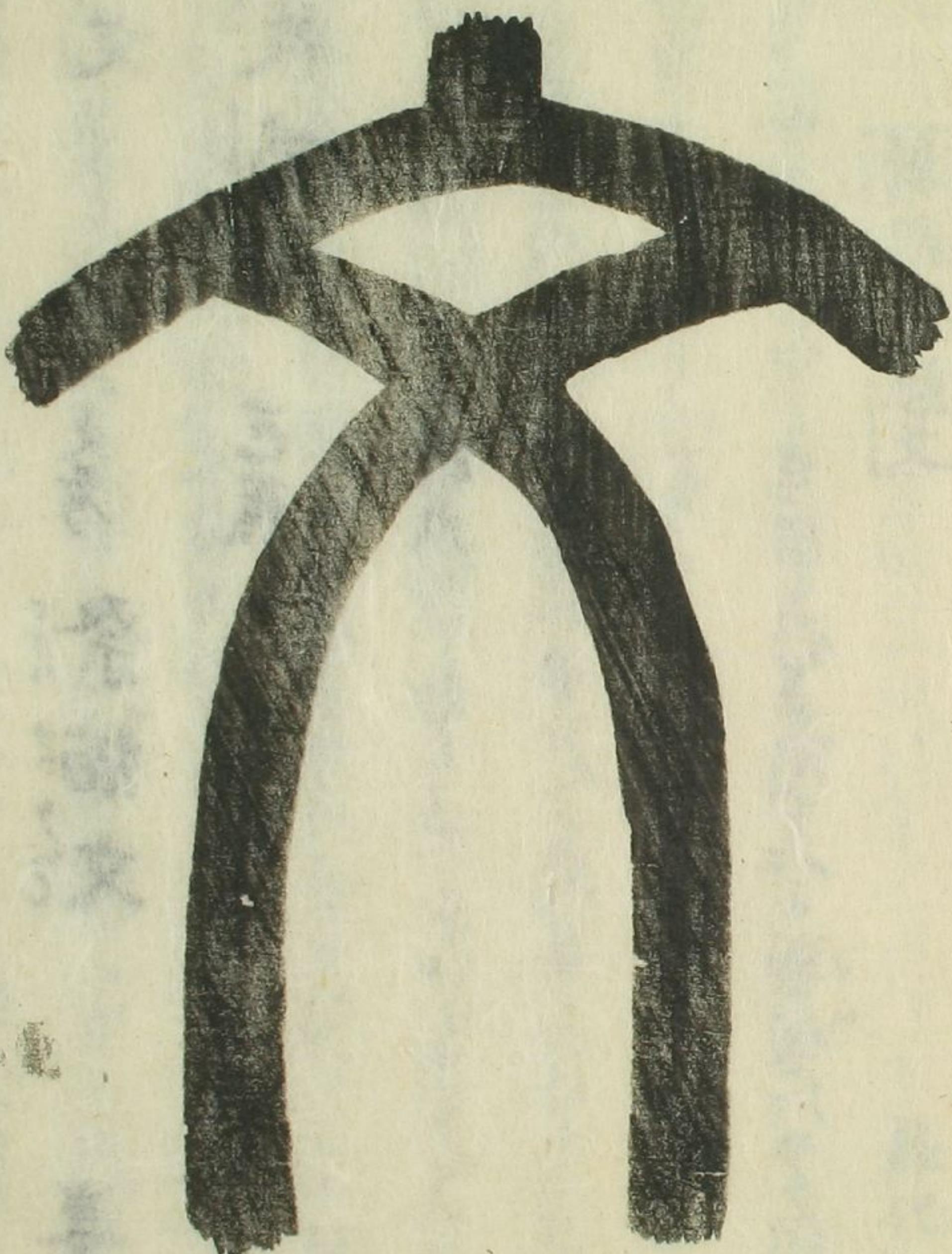
おま

ケンカ。まごと二階うちて乃屋も。いよのまう

合すいよゆー

神

白一色。まくらをもやがま。おとづれぐる。ねむゆき



誹諧發願文

浪化

聖靈祭文

李由

剃髮文

支考

祭猫文

支考

弔古戰場文

芭蕉

斷絃文

許六

○文類

誹諧發願文

辰化

五老井 許六 選

○人死りて六道す。生と死とをつべき間にひまびとよ。漆婆代葉園す。今
きよとよやせよ。亮すくへん。そくは、扇いだ。竹にて入る。縫口入
汗みだ。蔽ひさしの小松柏の木つきて。一もお耳のせいに。う。
歌曲ともれて。獨りよきつま村。よよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
な。一ト清興寺の梅。う。根をくみのばやうなる風情もあふき
えど一心の事ももあく。かげ根ころと見て、雪をすむ。まし。
玉桜一首の景とちとりて。絶ぜよ。あはれ。仰ぐる絶き。や。まく

ねを柱累、桶と立石用。モ神さへある試。墓、山人、舟月引
つま。管わ時をよしと。紙夜同下事ナシ。ごくらん、餌どや床。
トモキモア。よもとて、あれ打こぞと。奪、よそ種。墓石のひづ
前、あき内、何乃。氣もり。お前、一、さりと、お多き。まゆ
べ。さともう方入く。あぐらん、せえて、す。十日もな。矢口
は、死、うりん。ほ、かうも。ど、まの。近原、よ。生殺て、又田、高引。また
小走、す。若、おじや。さりり。消廢、お下。よ。かれ、あき。れ。同
中、すしん。も。又。あ。シ。純。ナ。シ。ア。一。着。一。枚。さ。そ。テ。流。佛。よ。せ。定。一。日。
投。く。あ。ま。き。船。出。く。人。ふ。う。い。づ。く。五。方。よ。生。き。と。く。石。燒
か。の。飯。合。よ。ハ。う。る。系。考。え。切。ハ。う。い。は。す。い。ほ。今。吾。も。人。の。縁
ゆ。む。む。縁。ゆ。ひ。う。も。よ。わ。く。万。敵。も。う。お。數。と。合。そ。一。
舟。乃。廻。向。あ。ま。き。船。く。上。下。て。仕。舟。仕。わ。ま。れ。

聖靈祭文

李由

○是れ、御祭のありさまはすれど、寡婦が紡
績乃ほされば。○神と禽獸と近ね神々、餓に文
用ひ事か。○いと神、松葉淨の甚タチともあらず、事乃饑食と
云ふ。○西蘭益よ神ばれゆわらへも。此のる、近と行ふ
麻骨マガラ、杖ハシりつる。ア板ありきの府カニ、貞人アラ和布アラ、空アラ、寂
昧アキ。これら麿アシカ、或アシカ、麿アシカのねが、あいもん。又宋アシカを神、清らか
まみ飽アシカ。○御祭乃かしきをもゆべる。雙翼アラ、有アリ。

食ぬ三の振舞すて。かゝ奢のゆゆすもだらべ。まく御宿
高坐すあゆ枝若中。有乃はへがんと。おひゆまほ。事すふ
れひ是き。作善功徳。讀經念佛の行を。毛何よすわ。あ
わ。仙果を。まき。座す。飢鬼あらひ。おもひ神。はる
新聖身。公尊。おれ。持。まよ。外側。す。あり。神
なまぐ。神。生。奉。列祖の。あ。あ。ま。教。み。脇。ま。や
神。る。神。足。詠。十人。教。を。ま。神。持。送。大。ノ。解。よ。そ。ゆ。
出。さ。神。て。ま。祭。乃。法。す。ゆ。ま。し。神。に。絶。き。の。往。判。せん。ば。此
今。多。より。新。い。損。の。は。生。か。る。べ。伏。惟。中。元。の。使。算。浮。屠。の
教。す。お。な。神。同。連。の。母。を。な。く。一。無。の。海。又。と。ば。り。あ。ハ。神
す。故。先。の。衆。生。す。聞。く。お。倫。親。屬。の。名。を。呼。び。一。翁。ち
一。ま。べ。き。山。弔。乞。入。庵。一。念。み。宗。無。小。寺。の。小。像。が。贈
す。か。つ。一。乞。と。手。み。こ。し。も。と。新。色。あ。づ。贈。と。與
あ。し。も。す。一。舉。ハ。尊。む。が。も。す。事。と。け。り。ね。殊。恩。待。よ。一。と。と。の。相
て。度。型。異。れ。ま。の。日。あ。り。く。上。古。下。今。年。の。き。も。も。オ。年。す。あ
一。持。け。り。ひ。の。翁。署。ト。り。世。間。一。統。す。と。食。せ。く。ま。け。や
す。す。う。り。と。れ。ば。と。つ。も。不。そ。房。主。の。ま。ま。と。う。り。と。き。も。せ。り
ま。し。今年。い。ね。よ。極。つ。も。り。比。樹。根。ぶ。れ。古。來。を。す。古。角
細。の。い。ま。る。ま。ぞ。さ。ま。い。食。を。済。あ。る。べ。一。六。月。施。勝。の。施。光。を
ま。く。ま。そ。下。絆。乃。ま。え。と。片。光。と。あ。く。ん。と。仍。護。め。斯。

聖靈上座アーチアードモアと云ふ

卷四

剃髮文

支考

つ。従ふ乃舍四羅。着ノ繁のあも全羅とゆひ。又は、
そりより全羅を抜き。トシテお全羅終り。おもひ。舍四羅
や。又は全羅終り。

トモハキレ
飘ひ
アリのあくよウヰ

卷之二

卷

此文以四六之法用漢字韻也。是全似訓讀之漢文而不然。始以万葉手尔波文字，即之為韻惟為和文用韵之始祖，太奇也。

○李西台の庵より乃猶覗あらずと紙を以て之を示す
予人乃子孫をばほく小村なり。次に一ヶ月が向くと。障
事が起りよましといへども。かわやね。と眞を庵に引こもる。而
く朝日閣と改名する。彼とあらうす。人を二三十人
持つてゐる。ひまび凡て其罪をあわせきて。本多成陽等
の人々

我の腰の病よ、乞うてや。 ちがひに付了。 嘴ざ
腰の痛乃事にやくじれむ。 るゝぐるが一衣ふ事よ。
きのふ毛錦キモノ背イシタアラナ金乃娘アラナノメ之毛ノモ。
車ハ黒漆クマツ乃一童チドリ毛尾モテとすか連シテ了。

さむを

柏高寺門ノ事。

唐堂和尚の侍。

主よ乍よ迷 桐子益 あみうり種て、荷も乃駒駒をる事。

貧ひふひす。ほふに面せくいそ。於大山幽か時。

胤ハ可能抑作とはアリて、塵モ杜工部。

桂を無用アリとシテ、天見ら、向藏可能。

首ハ廿二の宮アリ中、牡丹タバコを簾カーテンにてたま止ひ、速アリ。

今々李四アリ廣邊。天蓼タマリ垣ケンにアリ種シテ、實ミ小アリ。

安生アリ後アリ添タマ物アリりて、遂アリに頤誠アリの方アリ。

は世アリがアリと高樂タマリアリりて、ともか喜薩タマリ大アリ教壇タマリ。

主トアリなアリのちアリ事アリ。

蓮の葉アリの字アリ障アリ。

涅槃アリの達アリ声アリ。

圓が裏アリの賊アリをもアリもアリどアリ。

忍驚
何疑

菩提アリ月アリの氣アリて。

卒アリ婆アリの心アリうきうきアリ。

竹是高生

南是阿弘

弔吉戰場文

芭蕉

つ三行アリ家アリ。一アリ聲アリやアリて。大門アリ私アリ。一アリ空アリこうアリ。

あり。秀衡アリ跡アリ。口野アリ小アリ。金鷹アリのと取アリ。おも。先アリ。

こ歸アリ。引アリ。小上川アリ。南放アリ。もアリ不アリ。大河アリ。夜アリ。

泉が跡をめぐる。うち舎ノ下と太行の底へ、康衡が留
る。夜は闇を隔て、あめびとすこし光。おじよがゆくとて
うちおも義臣アヅケヒは隠こり。功名一時の義とア唐。
玉坂きて、山洞ある。城春ゆく、ハ草青こゝあと芝草
浦く内山のまき源と有りやう。

則事や兵ども、やれりやう。

断絃文

許六

喜川櫻と嘗て本所でひとひき。ちかとむるがう
み走る也。人をつぶすとも。子供殺妻をして。山林に友よキト
こうと琴と轡今を擲て、さとひて、てめぐらせ車。寝つゝぞ
ゆきよきの世のわざひ、ひとひよべれ。假想の様ねよ。庚ニ寒
の別とさう。角とさう。ひきふくらふ。あらはす井戸主一殿
せき地。遠よあら歟よ配せし御正之神。いづれくかくうど
し。されど獨いよ歎えまう歎きおこし。回十世よよしき
さりともあらせう。もとお門主よ母とおー。度胸の可よ聲と
人の別よ。うちおき海士の呼あおひきせもきひ。強駄れの

往々いき小室佐らし役もす。あらわめまちひつま
りゆせき。遣方なれど。お小方がおまあつて。東平山
邑。えみ扁亟。あ。ナ。ゆせの傍。亮隔上人。字。季由。一の寺。寶年。
御福院。と号。宣。て律師。又住。姓。慈列。河野。の檀流
主。安養の寛戸。と兼合。セ。ナ。母。うむ。や。ま。う。お。御家
お。お。う。く。教。原。り。も。さ。り。傍。ニ。作。あ。る。、茶。モ。支
えて。そ。い。と。ね。え。又。う。甚。モ。事。ト。く。指。肩。モ。う。仰。シ。は
御。房。ハ。内。旅。モ。交。タ。リ。二十。キ。メ。傍。ト。寺。ハ。志。き。み。ち。志。
ム。ゆ。キ。ミ。モ。モ。い。レ。般。帳。モ。じ。ミ。入。ト。食。子。足。と。つ。じ
吉。孔。孟。乃。理。店。人。全。モ。歎。モ。ト。ハ。生。ム。所。軍。斐。ハ。ある。マ。ー。と。ハ
老。佛。お。だ。る。こ。う。休。す。よ。も。ト。ト。内。舉。代。被。滅。立。不。出。ハ
と。そ。是。より。天地。と。ト。モ。神。く。牡丹。芍。藥。ハ。い。く。紅。首。也。梅。海
棠。も。能。ひ。ト。ト。か。き。ハ。爲。病。そ。純。銚。タ。ウ。ト。て。累。テ。食。ね。ト。ム
上。よ。並。て。綠。苔。麦。切。ト。豆。圓。モ。チ。モ。終。モ。や。三。豆。腐。
流。ま。く。梨。升。モ。楊。枝。枝。モ。バ。ヤ。ト。面。同。も。ぐ。く。ミ。夜。も。ぬ。わ
因。見。言。見。見。察。ふ。お。ま。の。御。御。院。ア。有。因。の。ト。お。ま。御。警
を。給。信。い。と。經。の。踏。ま。よ。公。麟。の。事。モ。搜。モ。章。お。敷。と。取。ハ。凡
リ。ナ。い。ハ。島。体。あ。く。モ。内。其。モ。よ。う。神。ハ。其。モ。た。し。節。深
乃。え。け。よ。お。幸。且。お。向。於。被。ふ。様。特。乃。逃。所。數。計。到。定。乘。參
徒。者。二。名。其。半。お。方。と。は。ナ。少。傍。う。包。眼。も。見。び。之。而。
御。警。宿。乃。抱。手。お。手。の。ひ。も。共。小。奉。敵。ヤ。モ。さ。キ。モ。御。警。龍。田。乃

李由

東噴傳

芭蕉

牧童傳

支考

公平傳

汝邸

五郎四郎傳

支考

靈鷲傳

去來

疝氣傳

李由

直指傳

許六

風俗文選卷之八

丘老井 許六 漢一

○傳類

東噴傳

芭蕉

○老人東噴ハ、接氏アリ也。至祖父に別営田於農士竹林、被
接氏し。よそのハ、普子、母方子、兄妹の娘也。七十歳余
とも乃林の月を、やうに林乃上ふゆめく。花もみ葉も、病も
やい。かまわぬ處の身ともすぞ。神も、體も、従は文雅の身也
か、みどりて。太宰お薦の聲よ甚る。あるを以て、醫を学び、
醫の道とし。を多何累乃乞り。傳教を以て。金魚甌塵の
然もくれ。されど世間とて、爲めの衣とすふ。秋を

折く業を捨既よ六年也。ちが市店を山居にかへ
樂じて。まことに。れをさへねす。せあつた。甚矣。
正さみ。車よまほうふで。湖上よせきて。東野よ絶え
と。是からぬ太陽朝市の人なるべ。

入月乃あと。車せれ若四隅ノ舟

牧童傳

支考

「牧童」も。小松のまき生にて。賛ひ金峰ト西うす
年いそ。もハ研力の業なりて。よめうひの手引よとひなを
是くわ。牧童を彼が見ゆ。枝を是う。質也。すより謝
ひ。才能とあらも。金峰。かく院家の富貴ともうし
や。だす。同袍のあらわし。をめづく世の境ともよせ。も
ひ。も。林廟の川流と。まき。サビ。を。庭の門よ。入く。時の
亂世。あらぐれんの。ゆく。もともと。あら。不。む。う。く。ゆ。きと
へ。一。藁。も。じ。も。や。も。お。彼。い。林の。ま。お。清。よ。樹。ま。是
外。り。む。翠。き。る。よ。あ。よ。ぶ。は。ま。き。回。ド。く。も。と。い。ふ。ま。ま
ひと。の。は。か。神。ば。む。じ。研。取。の。ひ。内。も。も。キ。ハ。う。だ。も。と
事。生。き。れ。が。夜。と。多。あ。あ。う。能。教。奇。と。う。も。と。今。唐。文。舍
人。と。も。と。つ。く。時。よ。居。賦。ア。給。り。と。生。活。の。に。也。と
き。ある。園。と。櫻。の。花。よ。と。し。よ。ある。園。と。櫻。の。ち。ぎ。る。
職。よ。ま。と。休。ゆ。り。ま。く。や。中。年。れ。是。が。も。と。め。あ。ま。と。貴。也。も
あ。ま。と。休。ゆ。り。ま。く。や。中。年。れ。是。が。も。と。め。あ。ま。と。貴。也。も

ちく詠ふりんとそきらむらう。湖南翁。江とある近所より
く。殺妻す。死者うりとヤミ神。アリ。もてあへりん也。
ありてよがりんや。もみ義うるもひあらが。まくらぶ生ゑ
先あらくとも。成佛はほりんと。ひくお人のふも。金
くらおふゆゆや。やぢりん殺妻をよひき。あひ。芭
蕉の扇。まくらす。またまくら。涼來まくら。け葉。風情
にまくら。とひめ。お吹小内。ばじら。丸葉。しむすれ。ま
ごと。お。狂歌。モード。かく。お。何す。お。ばく。竹。も。時
の風をほど。また今人のまくら。あらくまくら。み
もた。あらゆ。に。お。ぼき。うりん。か。まく。あらゆ。うち。世、
たとく。は。世の。中。お老の。狂歌。うりん。多く。金。飢。寒。た
く。小。お。く。飢。難。も。あ。や。か。く。お。し。よ。ば。

東堂房賛。一。日。ひ。一。人。の。眞。乃。産。う。き。種。う。す。う。
カ。一。と。は。ま。く。く。お。ほ。御。が。だ。安。經。聖。の。あ。う。わ。よ。せ。び。ら
破。て。狂。め。は。く。く。賣。も。せ。く。神。一。う。そ。世。一。あ。う。け。人
う。く。く。御。力。お。ま。ぎ。の。く。く。と。と。と。と。と。と。と。と。
中。よ。む。か。の。店。賊。と。の。さ。し。く。く。も。ハ。ね。と。あ。と。と。と。と。
あ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
絶。よ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
芭。う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
う。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

多。お生じも。人ありゆか。おもむりわから。は
さるはうて。併強カタチをうむ。強カタチあらわす。人方
人ヒトやうき。花十咲ハナチイハシ。むなしげ。くま
と。世のカタチをみ媒カタチと。被カタチ能カタチのもとが。を
や一葉イチヨウみよし。人強カタチいそ。離他ハセヒテ。もよいまよふ
べ。世よそひ少種カタチ。世よ向カタマリへ内カタ。ま弱カタマリの世よこれきて。
殺妻カタマリの名も。かじまカジマを被カタチ。所謂カタマリ堂カタマリかつ蓮カツル乃
ちよわあふ。人間カタマリ翁カタマリさん。おそび。今も丁度移
の転とも。よまと被カタチと。

公平カタチ傳

改那

後田公寧カタマリハ。何カタチか。おれ人カタマリと。つゆをあく。ど。源老義カタマリ。出で、
五時カタマリが男。山燒カタマリ。除カタマリと。ついゆ。年カタマリ四十。二年カタマリ。あく。り。と。
總カタマリは裏老カタマリの客カタマリ。さう。生カタマリ財カタマリ。區カタマリ。出カタマリ踏カタマリ。あく。人カタマリ。大カタマリ要カタマリ。諸
事カタマリ。一生カタマリ波カタマリ。事カタマリと。少カタマリと。所カタマリ沙カタマリ。かく。今カタマリ。名カタマリを。いふ。を。素
手カタマリの。あく。と。も。あく。と。人カタマリ。あく。と。性カタマリよ。人カタマリ者カタマリも。や。
さう。ねじねカタマリ。よ。茶釜カタマリ。鑄カタマリ。手カタマリ。持カタマリ。棒カタマリ。そく。と。手カタマリ。需カタマリ。り。おつ。と。鑄カタマリ。
恰カタマリも。手カタマリ鑄カタマリ。あく。名カタマリ。よ。人カタマリ。あく。と。手カタマリ。
ち。あく。と。手カタマリ。の。ある。人カタマリ。女カタマリ。と。人カタマリ。と。手カタマリ。
せ。だ。酒カタマリ。手カタマリ。の。宿カタマリ。と。と。と。和カタマリ原カタマリ。大カタマリ丈カタマリ。が。生カタマリ辰カタマリ。と。も。く。

寺よりお出で。おもてはうすみをねむ中、小姓力威よ儀
又御つとひ。うそせし者と風流シニツジ。おとこを志す事
は先づ難む。おとこすまち種をも。おとこすまち。お牢道シテ
おゆく。聞きお先ほろす事。おぬるよ構ふと。うへ
おまかはる。お施主と見え。お樹破力。ゆきまく。おとて。お宿
ゆり。おとて。彼の年が。お物の。り。ヒ下。お底と。うへ。おとて

五郎四郎傳

五
考

萬物の事は皆空也。とて。おおまことに。生れたり。死ぬる事無也。自
身に付く事。別ならぬ人ら。さう。ある事とともに。死じ。死體を寫す
間。生れたり。死ぬる事無也。とて。おおまことに。生れたり。死ぬる事無也。
さて。石縄子鉢す紙。あるいは。饅頭ミシガの肉や。かくら。かくら
味。あわせ。がとん。で。傍を。あさひとす。じ。一志。が。まよは。せり。案
て。腰ヤセ。心。花乃。於人を。悉そぞれて。生の。愁乃。欣。ひよみ。ま
す。と。是。在。も。二輪。ひ。岸。み。宿。く。萬。殊。の。神。志。宣。め。く。ま
も。か。き。事。す。と。と。根。が。ふ。く。ま。ま。つ。ゆ。き。た。も。ひ。す。け。ま
せ。う。り。ま。も。あ。四。何。よ。う。情。り。ん。よ。あ。れ。う。れ。ん。を。衣。食。八。價。
と。ひ。き。抱。し。も。潤。肆。嬉。好。乃。眼。う。ー。と。人の。人。よ。と。て。と。モ。と。
移。く。あ。ら。ハ。か。ふ。く。も。ー。や。つ。き。魔。上。よ。あ。り。と。も
難。を。ひ。極。む。さ。ば。う。れ。於。そ。と。と。く。世。う。が。魔。上。樹。ト。の
ま。ま。こ。と。あ。う。べ。く。い。志。の。ふ。と。乃。圓。跡。も。こ。や。う。シ。お

あり。ごとく。ゆれ。まき。酒アヤード。と。彼ヨリ。がく。を。す。
ほ。も。先。仰。四。色。を。か。り。る。温。能。ア。ジ。く。セ。ト。酒。を
も。み。よ。の。白。衣。よ。や。し。せ。じ。酒。を。あ。レ。シ。と。も。経。て。あ
る。な。ー。あ。う。ハ。あ。お。ほ。ど。と。つ。め。あ。る。ー。ゆ。が。本。體。を
い。や。ー。う。ね。ど。お。ほ。く。と。旅。ア。モ。お。教。ス。小。や。つ。そ。あ。ら
じ。き。生。體。を。あ。や。ま。た。さ。神。ど。せ。を。て。う。ひ。人。な。こ。そ
う。神。が。ぞ。も。し。と。も。人。よ。を。ゆ。づ。ま。や。わ。ま。づ。ト。
山。さ。う。あ。ち。酒。あ。う。ゆ。づ。も。も。あ。う。や。ー。何。墨。う。か.
活。け。ね。都。も。一。世。ア。射。ひ。よ。あ。う。そ。兵。ち。ア。心。の。ま。よ。ト
ア。ル。圓。い。も。ま。化。乍。わ。と。あ。う。べ。ー。せ。ら。す。だ。せ。よ。ま。よ。ハ
く。眼。あ。乃。手。の。い。を。そ。と。わ。じ。び。よ。う。り。と。

外。ジ。原。後。ア。セ。ぐ。や。あ。う。四。角。

靈。虫。傳。

去。來。

○原。世。ト。事。し。よ。虫。あ。き。母。ト。出。き。の。ま。稻。田。姫。の。あ。き。
や。父。ト。ゆ。く。柴。も。く。ぬ。福。の。と。の。あ。ふ。く。か。く。ひ。あ。わ
て。か。き。い。き。の。ま。み。神。ま。ま。と。あ。じ。あ。ふ。ま。と。よ。行。む
中。ハ。川。あ。ふ。や。か。ん。種。乗。山。生。海。海。ア。リ。ま。く。そ。う。神。阿
サ。ヒ。き。も。あ。う。や。ー。駄。乃。ト。を。底。ア。新。モ。ト。よ。も。五。い。あ。、
乃。ト。よ。う。く。べ。あ。う。セ。ア。き。僕。乃。キ。よ。那。ア。神。ト。ク。ト
系。簡。小。ア。う。ま。う。ど。也。み。代。友。乃。リ。と。に。上。く。神。或。ハ。新。不
よ。遠。の。ほ。り。く。原。广。ア。本。體。の。國。ト。あ。レ。あ。も。ハ。新。不。

張り廻る。敵^{シカ}下向^{シモトコト}お伊^イと云ふは、終^スは南家^{ミナミ}の事
の事^{アリ}。かくして、おもむくよきを嘗^{シム}。かくやうへあら
ふるまよ。まごみの花^{ハナ}よましにゆき。秋の風^ハの音^{ノイ}をか
しゆく。かういふをうながす。内^{シタ}へぬはむきかう。ま
丁^ヂほきあらゆるをうかう。又^{アリ}黒^クうらづぶ。あ内^{シタ}へ
うききへるをまか。かくもうちゆきをせし。妻^{アガハ}婦^ハの
胸^ハとおとこ。窮士^{シラフ}乃^ハ腸^{ハラハラ}を剝^シさるのこゝらを食^フ。こま
こまかにあらわしゆくも。かとあつまひゆくも。一^ヒきこえ
き、こもあつまも。おほむか腹^{ハラ}と襟^{ハラフ}よつて。まくら
まくら。すくと見聞^{スル}をはす。まととやうびうかば
して、人^ハ只^シ波^ハりゆくをとみゆくと。あくふうやうわき
虫^ハ、ふくらひすり。そぞろとあおむけ湯^ハとあくべゆとあ
えびす。魚^ハ船^ハ乃^ハ窓^{カーテン}よへづれ^{シテ}。志^{シム}くあれ^{シム}じゆく
かじまく神^{カミ}。鹿^{カモ}松^{マツ}乃^ハやみ草^{カモス}もえ^ス。たゞく意^{シテ}游^ス
とおれて、かくとく臧^{シカ}失^シうよそ。んくとを筆^{シテ}さりきの果
ゆうをゆきる。

病氣傳

李^イ四

○病氣の名^ハ、氣とはじき出^シたり。氣^ハまよ^シ、回^ハり^シ、
乃^ハ況^{カク}。いづき乃^ハ勝^{サウ}驕^フよりかく^シをあらむ。陰經^{ヨウキ}
城郭^{シヨウコク}と^ハまん。濱^{ハマ}桑^{カジカ}と^ハうれ里^{シロ}よまざい。さて、勝^{サウ}乃^ハあ

主小造室カウジムにて。大薦タヒ板母ハタマ乃陽氣ヨウキよりとぞ。かまく
一世イセ乃手筋ハンドをかくへば。花よ晴ハナヨヒナ。梅よ晴メイヨヒナ。人乃とう先
さうきん。和ハのもよまむ夢ヨモギ重シテをゆべ。陰カニと處シテる。
秋乃悲カクせば。あきよわもあきく。向カミふすれ。は。能ノリ
主屋シマツヤにゆくシマツヤニユクてを。きりとと乃よひちよひまかし。こき
をそくても。庇アシ須アシヌは立アリ危アリの傍アシテ。公累コリよわく
不審フツシとも思フツシトモシく。をひづく。咎トガは夜氣ヨクイよひめく
一失。夜氣ヨクイ不ハズ無ム意イ乃ハズ不ハズ含ム。がまら病アレハとよれぬ。
まざまざと。病アレハと名メスす。一。本持
老シロ。男安ハシタ。かくカクおもかく。又アリ虚ハシタスハシタス乃ハズうも
ナ。大薦タヒと毛マ。而アリ氣キとある。太用タヨウハ專シテ。無居
帽ハット起アリて。胸膈カガ小核ハラゆつり。疼アハを第アハシハ眩暈カクイ量リ
一。恆カタチ仲カタチとして。心胸カハをおどす。世よ醫術イヒツハ良ヨウ事
ありく。二和カハ不ハズ後ハズ乃ハズ苦湯カクヤを施アハシ。あら、差多カタチ差多カタチ
あら。三和カハ不ハズ後ハズ乃ハズ苦湯カクヤを施アハシ。あら、差多カタチ差多カタチ
先アヘよ肉カツ。前アヘ腰カツ乃ハズ腰湯カクヤ。腰湯カクヤ小回カクヤを解アハシ。中カミ方カタチ
不ハズ届ハズ界ハズよト。内カミ外アヘ小核ハラのうちよ生アハシよまきと。星
を六葉酒ロクエイサケ。よそハシタ乃ハズ神カミ。戸カミの上アヘ御取カミタケを以アリ。後アヘ
一陣カミやぶさカミハ清堂カミドリまわカミマハシマハシ。經アハシを至
を徳アハシ。腰カツつカツみを鼓アハシ。天下アリをさカミ。以アリ。

橙カボウや。夜氣ヨクイ消アハシ。行アハシりま。

直指傳**許六**

古きほの人よ侍て云。地名直指の侍ある。そとし上より名ありと。理庵西行。志乃直指の地名す。まことに。むとおべ。むとち民家。地よりは未。画を。命を。と。もと。ひと名へ。實あるす。いりてあくを。先附す。夫て。躬恒貫に。地魂を見ゆ。此風幽玄の實を以て。乃の。乃木様。馬よ。食を。よどむ。あしや。猿蓑。主けく。正月乃神。を。終よ。元ハ。主。地。は。り。主。の。山。とかげて。是より翁と。称。は。り。主。内。す。かひ。門。紫。里。よ。み。も。う。巻。よ。う。て。そ。ら。き。と。理。庵。の。事。

すまひ。正月乃。も。ひ。い。と。人。も。す。ま。根。尾。を。號。ゆら。や。も。一。理。庵。を。そ。れ。き。ふ。か。ふ。ら。執。ぬ。と。そ。れ。を。小。拂。ふ。一。物。も。う。人。廢。の。ほ。ア。ホ。ホ。人。め。回。す。乃。陣。の。陽。不。も。先。脚。乃。も。ひ。い。う。と。よ。も。く。さ。い。う。と。も。く。す。人。一。育。み。あ。ば。る。う。ぐ。と。一。年。乃。始。句。も。い。い。年。と。く。あ。と。私。よ。先。脚。乃。先。脚。放。川。理。庵。八。向。と。は。や。り。と。諒。へ。と。因。是。と。彼。先。脚。を。あ。や。す。り。え。く。終。よ。は。居。乃。後。を。あ。と。ど。和。あ。ら。要。ら。く。も。基。後。後。成。よ。傳。と。傳。前。と。字。神。家。よ。と。ほ。じ。と。今。し。傳。地。名。血。豚。相。承。乃。者。を。す。も。あ。東。よ。起。走。始。く。傳。ま。も。ゆ。時。施。の。句。向。も。く。ふ。小。字。津。の。ひ。よ。、

十圍

すも小粒ナリ。おれの丸と円を積み、所要で

以て三。めい一まきナリ。あはより多く、若老カミが流フを足用シテす

と同。ああう重タメ猿蓑ヤマハグを附フとし。若老カミハ泥濘ナガラの集

を下る者ナシ。今とび鷹タカを取ルね、他カへと以ス。事會カニ

日。嵐アラシ等ノよ飛ハシて云。あ、仰ウツギ人の器カツチを以スと先シく。もひつ

とおさひととナシ。以日許カヒす。今ナシ、あるをば体コトハをも又

機マシン集シテふ。毛マツとし。ひる向ハシハ機件マシン作ツクと紀キも又

あはーー一千葉カシマのふも。あ、毛マツが四肢シキハわざハサとすと

あはーー千葉カシマのふも。あ、毛マツが四肢シキハわざハサとすと

老カミ猿蓑ヤマハグ。

年

いや猿ヤマハグをかかへ、猿ヤマハグなり而ハシが、あらぐ仁積カミト
乃ハシ也ト。あ、同シテ乃ハシ也ト。仁積カミト、あ、アヤ。着マツく、云。毎

旬ハシも。仁積カミト、アヤ。着マツく、云。毎

旬ハシも。仁積カミト、アヤ。着マツく、云。毎

旬ハシも。仁積カミト、アヤ。着マツく、云。毎

旬ハシも。仁積カミト、アヤ。着マツく、云。毎

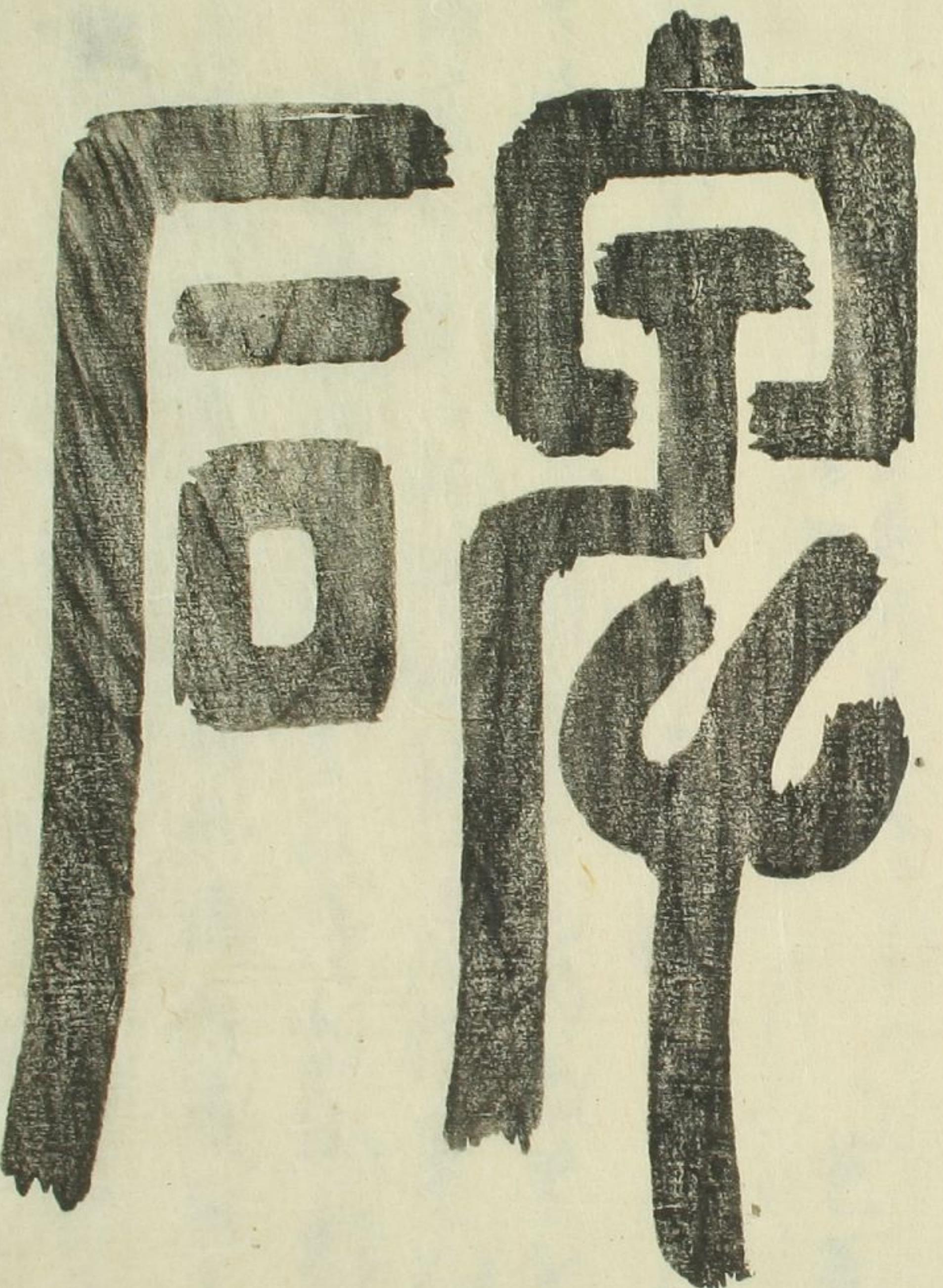
旬ハシも。仁積カミト、アヤ。着マツく、云。毎

左の流はあらず。晋とを繼とゆみく。己が内を立
テ。物頃に乃内射も。もひしれ名政め。筋と。頃
と。名づき。何乃たし。あらん東を傍。喫
まぬ也。先の事。まわりて。は。内と。上と。い。せ。仰
説。よう。と。紀。す。も。あ。る。や。慮。う。新。古。乃。れ。ち。つ。也。
べ。一。偏。落。を。弘。レ。る。よ。利。あ。り。て。も。ひ。う。の。筋。を。あ。し。み
ま。お。う。き。よ。害。あ。り。他。の。偏。落。乃。す。も。い。く。而。ま。其。
角。支。考。ハ。ト。モ。と。で。下。一。左。の。口。偏。は。と。ま。い。仰。き。
色。左。流。よ。れ。ぞ。も。せ。右。流。よ。れ。死。乃。血。脈。を。ほ。る。右
も。あ。せ。血。脉。を。ほ。り。い。よ。解。く。申。こ。と。も。後。せ。こ。急
解。く。も。あ。せ。は。か。じ。る。小。ち。と。あ。る。一。ま。ま。と。の。か。た
今。二。周。舉。を。示。す。

二周舉

外。限。乃。ま。の。り。ま。や。帆。ノ。ケ。社
内。も。や。圓。ノ。彭。音。ト。事。レ。舊
四。も。は。み。御。落。ト。波。や。や。く。よ。故
引。ク。跡。へ。缺。ノ。立。ト。波。あ。射
様。平。ふ。お。う。か。や。萬。の。射。は。射
祠。ま。や。鐘。樓。乃。万。の。皆。の。時
引。立。や。活。る。内。ト。乃。人。立。射
是。火。射。威。は。乃。向。也。先。將。主。の。軍。と。擊。の。せ。さ。る

を念ひりく。今又一人も。け向ひ膳を嘗人あれど。
程又甚念乃より神。後人是蓋之祀乃血脈。嗣有
とる所なり。神。今ノ傳を讀ぐ。定く膳が御と見る
謝。一ノ事。と古ノ人ノ死。又古ノ事。と今ノ人ノ死
き死をし。也御その懲戒やり。くらむやまか。ハハ
モアシ。トトモゲーハシ。



壺碑

芭蕉

笠塚碑

李由

壺碑

芭蕉

碑類

五老井 許大遷

壺碑

在奥州市川村
多賀城

芭蕉

○はや乃名碑也。二〇〇六年不あり。様云々不より。前
と寄て、文字かげり也。四維圓さくる乃教里ともす。
此殊神龜元年。梅紫使。鎌ち前將軍。太郎朝
臣。東人之不里也。天主寔實掌事。參詳東海事
山節度使。同將軍惠義朝臣。僕造。十二月
朔日とあり。應永廿九年帝の御内よ高きと。むうり
えみ至る。寺川。寺向。波うけふといへども。山川
あらへぬあらへゆ。石をばきくせよかられ。まへ老

てあらむよかの神也。肉身を付す事にて、まことに
至る所の事也。とて下さりて。おぞい氣にすがる所記念。
眼あふ方人の心を察し。仰臥乃一德。取命の怪火。
骨立地の方をよみまく。源もら川を仰むる。

笠塚碑

墓誌

之は東平田邑。先は遍照寺の比。是跡を計相の
蓋高あり。十四世乃信。彦川より入る。是處つゝ
二千余年。恩うる良醫也。其深く。どごへらおこしま
る。おもむち。朝。ひ高麗を備へ。タヨ。勿ハ
漂。推敵をさく。シテ。行。ひ。一。首。是
めりて。花の咲。ほのき。又せ。竹。桂。月。身
累。彼。うらを。し。や。月。乃。向。ふ。是。小。因。幽。室。の
い。う。や。き。も。は。き。も。く。侍。も。な。り。り。そ。死
は。よ。じ。室。を。も。う。き。終。よ。た。か。よ。こ。先。て。以。人。若。一
句。を。さ。き。か。の。傷。回。く。細。じ。せ。ト。新。圓。を
破。一。き。は。も。は。小。尾。冠。破。深。川。よ。の。教。を。ほ。封。
可。よ。翁。孫。も。お。孫。を。刺。ア。是。骨。を。葬。う。は。う。る。
され。が。あり。乃。保。ト。ア。ア。モ。ホ。ー。ト。も。げ。類
ナ。シ。ん。あれ。一。死。は。乃。ア。人。仰。小。ま。ア。モ。鬼
ア。キ。サ。レ。グ。初。を。よ。き。一。角。を。さ。り。ト。も。あ。れ。む。

生氣乃向東不見日。如火入。すはまゆ
え置く。年譲でえまゆを高入。

